

高知工科大学の開学時から現在までの英語教育の変遷

明神 千代*

(受領日：2019年2月20日)

高知工科大学共通教育教室
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: myojin.chiyo@kochi-tech.ac.jp

要約：高知工科大学は今年度で開学22年の歴史を持つ。それに伴って、英語教育はその22年間に幾度となくカリキュラムの改革等を経て、現在のようなグローバル社会に見合うようなカリキュラムが組み込まれてきた。本稿ではそれぞれの英語科目の特徴を具体的に説明しながら、高知工科大学の英語教育の歴史がどのように変遷したかを述べたい。

I. 英語教育の変遷

1. 開学前の状況

高知工科大学設立準備財団に英語担当教員として、ローリー・ハンター氏（前高知大学助教授）が任命され、1996年から1997年の一年間開学に向けて東西奔放をし、英語科目のカリキュラム案の作成の準備に当たった。当時CALL（Computer Assisted Language Learning）と呼ばれるコンピュータ援用による外国語教育が世界的にも関心が高まっていた。ハンター氏は、日本全国の大学を廻り、CALLに関する運営、そして教育の仕方を参考にした。そして、国際化社会に対応できる英語教育のカリキュラム作成にも貢献している。

2. 英語科運営

英語の常勤教員4名（内ネイティブ2名）は、開学年から2002年まで、情報システム工学科に所属し、数学担当の教員は電子・光システム工学科に所属していた。どうして、英語担当の教員が情報システム工学科に所属することになったかのいきさつは、未だ不明だが、偶然にも、英語好きな当時の情報システム工学科長が引き取ってくれたということは度々耳にしている。当然、情報システム工学科の仕事も就職を除いては、ある程度協力させてもらった。学年のアドバイザーになったこともあるし、情報システムの教務委員としてオープンキャンパス時の受験相談窓口に座ったこともある。また、外国人教員を含む、4名の英語教員は、受験者獲得のため、日本

全国（特に中国四国地域）の高等学校に自ら赴き、セールスもした。ただ、情報システムの知識はほとんど持ち合わせてなかったため、情報システムの宣伝はあまりできず、特色ある工科大の英語教育の宣伝に時間を費やしたことは事実である。

3. 英語教育（1997年度～2002年度）

開学1年目は、専門科目がほとんどまだ開講されてなかったせいもあり、大学全体として英語教育が注目された。「教育方法の主な特徴」（工科大のあゆみより抜粋）の一つとして、4番目に「英語教育の重視」があげられ、「...LL、CALLといった映像やコンピュータを活用した授業を行い、ディベートが可能な実用的で生きた英語能力を身につけさせる」と述べられている。

一年生の英語科目はI、II、III、IVと名付けられ、IとII（Oral English 1 & 2）は、一般の英語会話重視の科目であった。IIIとIV（Writing 1 & 2）は、工科大の目玉的科目のCALLの授業であった。この科目では、従来の紙と鉛筆を使った英語作文の授業とは異なり、生きた英語に触れながら、学生一人ひとりが個性と創造性を養い、且つ、英語作文の能力が少しでも伸ばせるように工夫している。この科目では、当時はまだあまり普及していなかったアップルコンピュータを受講者全員が授業中に一台ずつ使用した。学生達はほぼ平行して、コンピュータリテラシーの授業でWindowsなどのコンピュータの使用法を学ぶ。しかし、CALLの授業は、そのリテラ

シーの授業速度よりも速く、第一クォータでCALLを受講する学生達は、アップルコンピュータによって、一般的なコンピュータ操作方法を先に学ぶことになるのである(ちなみに1997年当時、コンピュータを扱える一年生は2割程度)。そのため、教員はアップルコンピュータの操作方法を指導するだけでなく、コンピュータ全般の知識の説明も行わねばならなかった。その苦勞の甲斐もあり、この授業は、受講者に人気があっただけでなく、学外の英語教員からも注目された。また、「初めて、英語に興味を持てた」という学生達の感想も多く寄せられた。

二年生の英語VとVI(Reading 1 & 2)は、英語購読で、できるだけ工学系の読み物を選び、語彙数を増やしたり、速読できる工夫をしたりした。英語VIIとVIII(Critical Thinking 1 & 2)は、ディベートの授業で、受講者達が、相手の言っていることを理解し、論理的に相手に自分の考えを伝えるようにプログラムが組まれている。一、二年生の英語科目は、クォータ制で、週2回、一回1時間で一単位となっている。

大学院修士課程の英語は、大学院開設年の1999年度から、Oral PresentationとTechnical Writing 1が開講された。Oral Presentationは、学生達が国際学会で発表する時に少しでも役立つような授業が行われ、Technical Writing 1は、工学系英語が書けるように工夫されている。修士英語科目は、学期制で、週1回、90分、2単位となっている。

4. 英語教育(2003年度)

2002年に岡村学長と4名の英語常勤教師が英語の授業に関する話し合いの場を設け、学長から英語教育の改善案が口頭で告げられた。それによると、一年生の時には、まずinputを主体にした英語教育がなされるべきで、二年生になると、outputの英語教育が主体となるべきだということであった。すなわち、inputとはreadingとlisteningで、outputはwritingとspeakingのことである。そこで、2003年度から一年生英語にReading/Listening1、2、3、4を導入した。2年生英語は引き続き、この年だけ旧カリキュラムの英語V、VI、VII、VIIIを教えた。Reading/Listening1、2、3、4は、テキストは少し易しめものを選び、学生達がテキスト中の語彙と文を身に付け、ネイティブの話す文章を何回も聴くことによって、英語聴解力を高め、また、ネイティブに近い英語発音ができるような授業にした。また、高知工科大学英語教員がテキストの各レッスンに沿ったテーマのナレーション、談話、描写等のビデオを制作し、それを見

せ、listening comprehension テストも実施し、聴解力を付けさせた。

5. 英語教育(2004年度 & 2005年度)

2004年度と2005年度は、一年生には同科目Reading/Listening1、2、3、4を教え、二年生英語は、Thinking in English1、2、3、4を開講した。Thinking in Englishは、以前教えていたCritical Englishの改訂版で、前半では、基礎的な英文とパラグラフを使って「描写、分類、因果的連鎖、推論」を学び、後半では、「原因と結果、比較、賛成と反対」に関して、ディベートができるようにプログラムが組まれている。これで、岡村学長の要望どおりの英語のカリキュラム、すなわち、まずinputから入り、そしてoutputの授業を行うカリキュラムが出来上がったことになる。

6. 英語教育(2005年度～)

2005年度から、三年生英語科目、Business/TOEIC English、Technical Reading、Global Citizen、Technical Writing/Presentationが学期制で開講された。週1回、90分、2単位となっている。一年と二年で英語を勉強しても、その後、大学院に入学したり、就職するまでの2年間の空白の時間が長すぎるという理由から、三年生英語が開講されることになった。Business/TOEIC Englishでは、Business Englishの表現に慣れ、会話ができるようにし、そして、後半の時間にはTOEICリーディングとリスニングの小テストを実施し、TOEIC本試験に備えて勉強をさせている。Global Citizenでは、「地理、歴史、経済、環境問題、人権問題、文化、宗教」等、今日の世界情勢に慣れ親しんでもらい、文章を書き、それを自分の言葉でプレゼンする工夫がなされている。

7. 英語教育(2006年度～2016年度)

2006年度から、一年生英語は、従来のReading1と2、そしてScience LabとScience Englishが新しく開講され、二年生英語は、従来のThinking in English1と2、そしてScience Reading1と2が新しく開講された。Science LabとScience Englishは、LLとCALLでノートパソコンを使って、グループで物体を査定や計測したり、またミニプレゼンを行うなど学生が主体となった授業を行っている。学習のトピックと資料等は、工学専門の先生方から提案、提供してもらい、ESP(English for Specific Purposes)の授業を展開している。最近では、ノートパソコンだけでなく、iPodやiPadも各自一台を使用して授業を進めている。Science Reading1と2は、工学系論文を読

みこなせるようになるための「英語の基礎力」を養う授業である。比較的平易な英文を速読し、要点を把握できるようにしている。

一年生英語を Reading/Listening1、2、3、4 から Reading1、2 と Science English と Science Lab に変えたのは、Reading/Listening が4クォータもあるのは、学生にとって飽きてしまうのではないか。それよりも、コンピュータを使いながら、工学系の英語を身に付ける方が学生にとっては興味を持ちやすいのではないかという理由からである。また、2年生英語 Thinking in English1、2、3、4 を Thinking1、2 と Science Reading1、2 に変えたのも同じ理由からである。

8. 英語教育 (2013 年度～)

2013 年度にマネジメント学部国際マネジメントプログラムが開設されたのに伴い、一年生英語として、一学期は Speech Communication、2 学期には Power English が新しく開講された。他学群からでも、中級程度 (TOEIC500 点以上) の英語力を持ち、英語学習に意欲的に取り組む意志と英語力を高めたいという強い希望を持つ学生は履修できる。マネジメント学部国際マネジメントプログラムの学生は一名しかいなかったが、この2科目を他学群の十数名の意欲ある学生達が履修した。これらの科目は、従来の英語科目では易し過ぎてチャレンジできない優秀な学生にとっても英語力を伸ばす動機付けとなっている。Speech Communication の目標は、Public Speech が上手くできる英語運用能力を身に付けることである。Power English では、受講生は準備してきた内容を活用して、積極的にグループでの議論に参加し、授業終了後には、その内容に対する自分自身の意見をまとめて、短いエッセイを書くことになっている。2013 年度には、これら2科目を履修した学生達が、全国大学生英語スピーチコンテストに応募し、優勝こそは逃したが、出場校 100 中 10 校内に選抜されるという好成績を残している。

9. 英語教育 (2014 年度～)

マネジメント学部国際マネジメントプログラムの2年生向けの一学期科目として、Presentation が新しく開講された。この科目の目標は、効果的な口頭発表ができる能力を身に付けることである。同プログラムの2年生の2学期科目として、Reading & Writing Workshop が開講されることになっている。この講座では、教室を、外国語を覚える場所ではなく、外国語を使って、様々な文章を味わい、自分の

考えや意見を英語で表現する場所 (workshop) に変える。英語で読むことや書くことで真の楽しさを知っている Life-long reader and writer に成長するための礎をつくることが目標の授業である。これら2科目もまた、一年生科目と同様に、他学群の英語能力があり、やる気ある学生達も履修できる。

10. 英語教育 (2017 年度～)

開学以来の英語教育カリキュラムの大改革が2017 年度に行われた。開学以来、英語科目は演習扱いとして、各クォータ、週2回、一回60分を15回で1単位であった。それが、各学期、週1回、一回90分を16回で2単位に昇格したのである。日本がグローバル社会化する今日において、英語教育の重要性が再認識されたからだろう。1年生科目は、Listening/Reading と English Project で、2年生科目は、2018 年度から Presenting Idea と Reading Workshop となった。それぞれの科目のテキストは、世界中で注目されているテーマを扱い、4技能を強化する工夫がなされた教材を採用している。テキスト中の本文の英語も平均的的学生にとってチャレンジングで、十分な予習と復習が必要なレベルである。

高知工科大学が2009 年度公立大学法人高知工科大学となり、学生の平均的成績レベルもアップしたが、まだ落ちこぼれ組がいる。そんな学生達を新カリキュラムでどうやって指導して行かか、我々英語教員の喫緊の課題である。

II. プレイメントテスト

一年生の入学時のオリエンテーションで、2006 年度から毎年プレイメントテストを実施している。以下の表からもわかるように、平均点が2006 年度には15.6 (35 点満点中) だったが、2014 年度には21.1 まで上がっている。2009 年に高知工科大学が公立大学法人化する前年だった2008 年度は、平均点が過去最低点の14.5 を記録している。この6年間で、平均点が6点 (35 満点中) も上がったというのは、ある程度の英語の基礎学力が付いている学生が入学してきていることが伺える。

ただし、2017 年度からプレイメントテストとして、CASEC テストを導入している。これは英語能力テストではあるが、個人の能力に合わせてテストも問題を変化させていく適応型のテストシステムなので、TOEIC や TOEFL に比べて短時間 (約40 分) で正確な測定が可能だ。4月の授業初日に1年生全員がコンピュータ・ワークステーションに行き、各自がコンピュータを使って、聴き取りを中心

工学部・マネジメント学部1年 英語プレイスメント・テスト 経年比較

1年	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
N=	442	370	345	523	503	506	498	498	511
Mean	15.6	16.0	14.5	18.4	20.3	20.6	20.0	21.0	21.1
Max	33	32	32	34	35	35	34	35	35
Min	2	4	0	5	4	5	1	5	5
SD	5.75	5.78	5.96	6.67	6.45	6.02	6.40	6.38	6.31

に文法テスト、語彙テストを受け、その結果を各自のファイルに記入する。そして、1年生と2年生の授業の最終日に再び、CASECを受け、どれだけスコアが向上したかを、診断表を元に確認する。2年間で合計3回CASECテストを受験することによって、学生各自で自分の英語力がどれだけ向上したかを認識し、より効果的な英語の学習法を身に付けることができるのである。CASECテストは実施を始めて間もないため、学生達各々、あるいは全体のスコアの動向追跡結果はまだ出せていない。

III. TOEIC

2007年度から年2回、TOEIC IP (Institutional Program) Testを学内で実施している。公開テストと比べて、受験料は半額で、学内で気軽に受験できるというメリットがある。しかし、2007年度当時は、まだ50名位しか受験者がいなかった。当時は、まだTOEICテストの重要性が学生達に周知されていなかったのが、主な理由であろう。そこで、英語教員達と教務の関係者達が団結し、授業中にちらしを学生達に配ったり、ポスターを学内の何か所にも貼ったりして、周知を図った。また、2009年度からTOEIC Testのスコアが420点以上の学生に2単位を与える、単位認定制度も導入した。その結果、2013年度には、250名以上も受験者があった。2018年度の現在も200名以上の受験者をおおむね維持している。成績を見てみると、2007年度当時は、340点(990点満点)だったのが、2018年度には、平均447点を取れるようになっている。平均点で100点以上向上した現在では、500点以上の学生数も急増し、700点~800点の学生数もこの20年間で劇的に増えていることは事実である。

2013年度には、一年生に対して、年一回の受験料を無料としたが、受験生数が予想以下であった。そこで、2014年には、一年生全員を強制的に4月に受験させた。この試みには、まず早い時期に自分の実力を知り、就職活動や進学の準備までにできるだけ高得点を取ってもらい、自分の将来の進むべき道の

選択肢が増えればという目的がある。現在、TOEIC受験の重要性の学生への周知は十分行われている。今後も「TOEIC 高得点」を全学的な重要目標として、教職員が一丸となって指導していきたい。

IV. English Learning Square (E-Square)

2016年度から学生が主体的に学習することのできる英語学習に特化したコモン・スペースを設置している。英語常勤教員や国際交流センターの教員が常駐し、英語学習や国際交流に関する相談受け付けている。また、英語会話や英語論文の校正も行っている。開始して3年間で、訪れる学生数は劇的に増えてはいないが、利用している学生の中には定期的に参加し、劇的な成果を上げている者も数多くいるのは事実だ。E-Squareに毎週参加し、TOEICスコアを1年間で500点から700点台まで上げた学生達や海外留学によって好成绩をあげて帰国した学生の数も多い。ある面では、E-Squareの設置は、成功しているが、更に多くの学生達が、もっと気楽にE-Squareを利用し、英語に興味を持ち、英語能力の向上が目指せるように、英語教員が一丸となって尽力したい。

V. おわりに

開学から2018年度までの高知工科大学における英語教育の歴史を述べてきた。開学当初から20数年の歳月が過ぎた訳であるが、我々英語教員は、その歳月が過ぎる度に最新で最良の英語教育法を駆使し、実践してきたという自信はある。学生達の英語基礎能力のレベルや興味の度合いを意識して、幾度となく英語カリキュラムを変更してきた。その結果として、現在、高知工科大学では最も理想的な英語教育が実施されている。

近年は教育界だけでなく、政財界の分野でも、グローバル化やグローバル人材育成等の言葉を頻繁に耳にする。高知工科大学は、「日本にない大学」をモットーに、20数年前の開学時から世界に羽ばたけるグローバル人材の育成を目指して熱心に教

育改革に取り組んできた。そのために、前述のように、開学当初から「教育方法の主な特徴」の一つとして「英語教育の重視」が挙げられている。

英語ができる人＝グローバルな人、あるいは国際人とは、決して言えない。国際人とは、言語は何であれ、多様な人と共生する中で、自分と自分の言葉をしっかり持ち、他者との相違を認識し、自分で考え、相手の立場に立って意見を述べながら、問題を解決していく能力を有する人のことを指すと思う。そのためには、自国の歴史、教育、文学、政治などを相手に発信できるための教養を身に付ける必要がある。

『言語は何であれ』とは言え、英語が「国際語」になりつつある現代社会においては、英語をコミュニケーションの道具として習得することは、グローバル人材を育成する近道とも感じる。今後、社会が益々グローバル化する状況の中で、英語教員の役割は極めて重要になると信じて止まない。

【全学】

年別	受験者数	最高点			平均点		
		LISTENING スコア	READING スコア	TOTAL スコア	LISTENING スコア	READING スコア	TOTAL スコア
2007.6	51	360	330	690	208.0	132.5	340.6
2007.12	81	365	370	695	198.0	140.2	338.2
2008.6	124	400	305	665	195.9	136.8	332.7
2008.12	51	360	330	690	208.0	132.5	340.6
2009.7	162	375	310	660	207.6	143.8	351.4
2009.12	103	410	335	710	196.4	135.5	331.9
2010.7	100	335	300	620	212.1	148.8	360.8
2010.12	148	355	295	590	218.9	136.0	354.9
2011.7	155	435	345	755	212.4	153.9	366.3
2011.12	148	354.9	295	590	218.9	136.0	354.9
2012.7	146	405	365	745	221.9	143.5	365.4
2012.11	113	495	485	980	228.8	160.9	389.7
2013.7	223	465	430	885	222.1	155.1	376.2
2013.11	254	440	345	785	208.2	149.1	357.4
2014.4	483	400	325	720	181.9	128.4	310.3
2014.6	202	470	390	850	229.5	154.4	383.9
2014.11	183	460	390	850	226.0	167.1	393.1
2015.4	620	450	390	840	181.6	123.5	305.0
2015.7	205	495	405	900	225.7	160.7	386.3
2015.9	44	435	430	865	226.3	179.3	405.5
2016.1	278	450	390	840	220.3	156.7	377.1
2016.4	543	345	295	630	191.1	137.2	328.2
2016.7	209	485	430	915	236.2	171.3	407.5
2016.9	60	445	360	805	233.6	168.4	402.0
2016.11	69	465	355	805	236.6	182.4	419.0
2017.1	201	445	445	890	231.8	166.9	398.7
2017.2	60	445	415	835	226.3	177.6	403.9
2017.5	525	450	320	750	185.0	133.2	318.2
2017.8	222	395	330	720	227.0	165.2	392.3
2017.9	54	360	320	680	238.1	173.0	411.0
2018.1	171	430	355	785	248.3	184.5	432.8
2018.2	72	440	350	765	238.3	181.2	419.5
2018.5	211	460	435	895	222.7	167.5	390.2
2018.7	141	490	450	940	236.5	175.7	412.2
2018.9	45	480	400	860	248.7	198.7	447.3

Evolution of English education at Kochi University of Technology, from its Foundation, in 1997, to the Present

Chiyo Myojin*

(Received: February 20th, 2019)

Core Studies, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782-8502, JAPAN

* E-mail: myojin.chiyo@kochi-tech.ac.jp

Abstract: Its curriculum has evolved throughout the ensuing 22 years to best prepare its graduates to successfully integrate, on professional and personal levels, into the global society. The purpose of this paper is to describe that evolution of English education/instruction, explaining in detail the characteristics of each course.